

# 新刊本のシアワセ

文・豊崎由美 書評家

フランスで話題、コメントも楽しい風景雑記『東京散歩』。



『終わりの感覚』  
ジュリアン・バーンス  
土屋政雄訳  
新潮クレスト・ブックス  
1,785円



『厭な物語』  
アカサ・クリスティー他  
中村妙子他訳  
文春文庫 580円

**自**分ではまったく覚えていない言動が誰かの人生を大きく狂わせていた。そんなたぐいの若気の至りもあることを教えてくれるのが、ジュリアン・バーンスの『終わりの感覚』です。

一部は、引退生活を送っている(私)による若き日々の回想の記。自殺してしまつた親友エイドリアンと、初めての交際相手ですが、のちに自分と別れてエイドリアンとつきあうようになったペロニカにまつわる思い出がづらられています。二部の舞台は「ある女性が死に際して、エイドリアンの日記と五百ポンドをあなたに遺した」という弁護士からの手紙が届く現代。その女性とはペロニカの母親の日記を(私)に遺したのか。なぜ、ペロニカは日記の引き渡しを拒否するのか。(あなたはほんとにわかつてない。昔もそうだったし、これからもきっとそう。)再会したペロニカが繰り返すこの言葉は、何を意味するのか。

すべての謎が解けるラスト、ショックを受けるのは(私)だけではありません。人間とは自分の人生を(語る)とき、あそこを手直しし、ここを飾り、そこをこっそり端折る」といった具合に捏造する生きものだということ。その苦い真実に、リアルに迫るこの物語に最後までつきあうと、(私)の痛い体験が他人事ではなくなるはず。戦慄の傑作。

そんな、いつまでも忘れられないパッドエンディングの物語ばかりを集めたのが『厭な物語』です。誰からも好かれる人柄のヒロインが、幼なじみと結婚した

## 二十歳の頃に 読んだ本



アンナ・カレーニナ (上) トルストイ作  
中村融訳

赤六七一 岩波文庫

ありとあらゆる恋愛の形が書かれ、毎回違う顔を見せてくれる小説です。  
**中野香織さん**  
エッセイスト、服飾史家

富山で過ごした高校時代、3年間で近所の県立中央図書館1階にある開架の小説は、ほぼ全部読破したという中野香織さん。東大在学中は心理小説にハマリ、行き着いたのが『アンナ・カレーニナ』だった。

「人間が経験し得るありとあらゆる恋愛の形が書かれていて、完璧な小説だなんて思うんですよ。20代のころは何も思わなかったけれど、いま読むと得心できることもあるし。読むたびに新しい発見があるので、いまでも読み続けているんです」

アンナの烈しく燃えるような愛。地方領主のレーヴィンとアンナの兄嫁の妹・キチイとの愛のドラマ。あるいは浮気ばかりしているアンナの兄とその妻との愛の形など、愛のバリエーションが詰まっている。

「いま草食系男子が話題になっていますけど、この本を読むと草食系男子が生まれる理由がわかります。それは女性がアグレッシブになりすぎているからなんです。男性に追っつけさせるといのが、恋の情熱が長続

### 『アンナ・カレーニナ』

トルストイ 中村 融訳 岩波文庫 上945円、中903円、下945円。  
政府高官の妻、美貌のアンナ・カレーニナ。兄弟夫婦の仲裁にモスクワ駅に降り立ったアンナは青年将校と出会い、その運命が大きく変化することに。文豪トルストイがすべてを注ぎ込んだ不朽の名作。

きする秘訣で、その原形がちやんと描かれているんですね」

3月末からキララ・ナイトレイ主演の『アンナ・カレーニナ』がロードショー公開されるが、それに先立ってすでに2度も見ってしまったという中野さん。

「これまでもグレタ・ガルボ、ビビアン・リー、ソフィ・マルソーと、それぞれ主演した映画があつて全部見っていますが、今度の映画は原作のエッセンスがよく出ている特別に面白いんです。しかも衣装が豪華で美しく、見応えがあります。アンナの夫のカレーニンを演じるジュード・ロウがまたシブくて(笑)」

そのカレーニンのアンナに対する態度にしても、立派だなと



『東京散歩』 フロラン・シャヴエ



『abさんご』 黒田夏子 文藝春秋 1,260円



『閉経記』 伊藤比呂美 中央公論新社 1,470円

女性の秘密を知って——というアガサ・クリステイの「崖っぷち」など、名作あり、ミステリーあり、恐怖小説ありと多彩なラインナップ。11編すべてが◎の好アンソロジーになっています。

本から元気をもらいたいという方におすすめしたいのが、57歳の詩人・伊藤比呂美の『閉経記』。「経血やしよほしよほしよほと寂しそう」といった戯れ句をタイトルにした48編のエッセイがおさめられています。『良いおっぱい、悪いおっぱい』などの著作で、常に女性性と向き合ってきた伊藤さんだけに、自分の日常生活や日々考えることのすべての根っこに、閉経前後の体があると看破するのがさすが。同世代必読の書です。

75歳で芥川賞を受賞した黒田夏子の『abさんご』は、筆致のみずみずしさに驚嘆必至の作品。つづられているのは幼い頃に母親を亡くし、その38年後に父親を失うことになる〈子〉の記憶で、蚊帳のことを〈へやの中へのやのようなやわらかい檻〉と表現することで固有名詞を排したり、カタカナを使わなかったりを、黒田語といってもいい独特の日本語を駆使した若々しい小説なんです。

最後はビジュアル本で、フランス人の青年フロラン・シャヴエが約半年間に見た、東京の風景や人、出来事を絵と小文で描いている『東京散歩』を。GFが滞在しているというだけの理由で来日した著者が、拾った自転車に乗ってうろろろし、道端に座ってひまつぶしに絵を描いてみたという軽いスタンスがいい。日本人なら素通りするようなところに目を向ける視点と、脱力系のコメントによって再現される東京が、わたしたちが知らなかった東京になっているのも素晴らしい。すべてのページが楽しい一冊なのです。

とよみさき・ゆみ★最新刊「ガタスタカ屋の神持 場外乱闘篇(本の雑誌社)」は、数年にわたる書かれた15〜1作分の書評を収録。大森望との共著「文字責メッタ新刊!ファイナル」(バルコ)も好評です。



『朝ジュース×夜スープダイエット』 藤井香江 講談社 1,260円

「朝ジュースダイエット」で20kgの減量に成功した著者が、朝の酵素たっぷりの生ジュースと共に実践しているのが良だくさんの「夜スープ」。デトックス効果の高いジュースと脂肪燃焼効果の高いスープの2段階で「やせやすい体質」に。おいしくやせるレシピ満載。

『喪失』 水田静子 ポプラ社 1,575円

東京の小さな出版社で雑誌編集者として勤務する文乃は、鎌倉の緑深い谷間に暮らす気難しい画家・暁子を取材することになる。悲しい過去を秘めた孤独な2つの魂が出会い、妻でだす再生の物語。静かな筆致が魅力的な、第1回ポプラ社小説新人賞特別賞受賞作。



『40歳からのおしゃれレッスン』 林恵子 文藝春秋 1,470円

40代以降になると体形が変わって似合う服がわからない。そんな悩みを抱える女性たちのためのファッション通版「ドゥクラッセ」。その社長自らが伝授するおしゃれな着こなし術。二の腕のたるみやおなかぼっこりをどうカバーするか、役立つヒントがいっぱい。

『曾野綾子自伝 この世に恋して』 曾野綾子 WAC 1,470円

両親の不和。戦争体験。作家デビュー後、不眠症に苦しみ、過労とストレスから失明しかけたことも。しかし人生で与えられたことにはすべて意味がある。「思えば、私はずっとこの世に恋し続けてきたんです」と、80年の人生を余すところなくつづった感動の自伝。

編集部おすすめ 話題の本



なかの・かおり★東京大学大学院修了。ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。男女ファッション史から最新モード事情まで幅広い視野から研究し、執筆・レクチャーを行っている。著書に「愛されるモード」など。

思うときもあるし、偽善者だなど思うときもある。それはそのときどきの自分の状況によって見方が変わるから。「玉虫色だからこそ不朽の名作なんです。どっぷりハマれる大河小説で、でもあの長さを感じさせずに読めるのは、すごいことです。ずっしりと読み込めがあります。毎回違う顔を見せてくれる本。そして繰り返しになっちゃうけど、愛の諸相について教えてくれる本です」